

教材研究と教材の扱い方 (34)

——「コンクリートの時代」(隈研吾)——

菅原敬三

一

「コンクリートの時代」(隈研吾)(15三省堂現B304)の前半部を取り上げたい。時代の特徴に目を向けた評論文である。

本文は次のようになっている。

「二十世紀はどんな時代でしたか」と尋ねられたら、皆さんはなんと答えるだろうか。僕は躊躇なく、「コンクリートの時代でした」と答える。

それほどに、コンクリートという素材と、二十世紀という時代は、相性がぴったしだったのである。ぴったしだっただけではなく、コンクリートという素材が、二十世紀の都市を作り、国家を作り、文化を作った。その産物の上に、今も僕は暮らしているのである。二十世紀のテーマはインターナショナルイズムでありグローバルゼーションであった。ひとつの技術で世界を

覆いつくし、世界をひとつにすることがこの時代のテーマであった。物流、通信、放送、あらゆる領域でグローバルゼーションが達成されたが、建築、都市の領域で、それを可能にしたのがコンクリートという素材だったのである。

まずコンクリートは場所を選ばない。木の薄い板を組み立てて型枠を作る程度の技術は世界中どこにでもあったし、コンクリートの構造材料である砂、砂利、セメント、鉄筋は世界中どこでも入手可能であった。型枠の中に鉄筋を組んで砂、砂利、セメントを流し込めば、それまでである。鉄骨の建築も、二十世紀の産物であるが、鉄骨造はコンクリートに比べれば、はるかに難易度の高い、高度な技術であった。

コンクリートほどに普遍的(グローバル)な建築技術は、かつて歴史上存在しなかった。だからル・コルビュジエは、インドの大平原の中のチャンディガールのような場所で一九五〇年代に新都市を作る時にも、

コンクリートを自由にあやつつて空に浮かぶ巨大な彫刻のような自由な造型ができたわけだし、一九九〇年代にルイス・カーンがバンングラデシユの国会議事堂をダツカに造つた時も、コンクリートを選択して、古代遺跡のような姿の建築を作つたのである。

しかも、この素材は、場所を選ばないという普遍性のみならず、どんな造型をも可能にするという、もうひとつの普遍性、別の言い方をすれば自由を有していた。型枠の作り方を変えるだけで、どんな曲面も自由に作れるし、もちろんストレートでシャープな骨組みを作ることも簡単である。

だから、建築を学び始めたばかりの学生はコンクリートが大好きである。自分が作りたい形の輪郭線を描き、その線の内側はコンクリートが詰まっているということにすれば、一応図面としての整合性はつく。鉄骨造や木造の図面を描こうと思つたら、そうはいかない。「ジョイントはどうなっているんだ。収まってないじゃないか」とか、「これじゃ部材と部材の間隙だらけで、風も虫もどんだん入ってくるじゃないか」と教師にどやしつけられる。そういう教師自身が、残念ながら実際には鉄骨造や木造の図面は引けない。それほかに、コンクリートは群を抜いて「易しい建築」なのである。

しかも、この形の自由さにプラスして、表層の自由というおまけもついてくる。豪華で、お金がかかったふうな建物にしたい時は、コンクリートの上に薄い石を貼りつけたい。ハイテクっぽく、未来っぽい味付けをしたい時には銀色でシャープなアルミの板を貼ればいい。自然派、エコロジー派を気取りたい時には、木の板を貼り付けたり、珪藻土を薄塗りすればいいのである。

ここまでが、教材の前半部と考えるとよい。後半は「しかし」という接続詞によつて論理が転換し、コンクリートの限界に迫る筆者の論が展開されるのだが、ここでは割愛したい。

二

こういう教材を教室で扱う時、事前に注意しておかなければならないことがある。作品と教材に関してのことである。

冒頭の「二十世紀はどんな時代でしたか」という筆者の問いかけは誰に対してなされたものなのか。

作品というものは、「この文章は教科書のために書き下ろされたものである」などという特別な事情を除けば、社会

人が社会人に対して書かれるものである。それが原則である。

したがって、この文章の冒頭に提示された「二十世紀はどんな時代でしたか」という問いかけは、筆者が社会人に対してなされたものである。

それが教材として採用されたのは、筆者の問題発見、解決の方法、真理を追及する精神性、また論理の展開やその構成員、人の心を動かすほどの優れた表現などが学ぶに足ると総合的に判断されたからである。

しかし、だからといって、安易に生徒に向かって「二十世紀はどんな時代でしたか」と問いかけることはできない。それは、無理であり、無謀というものである。高校生にとって、今一番の問題は自分の進路であり、総括的に「二十世紀はどんな時代で」あったかなど問題は視野に入っていないからである。ましてや、社会人として、社会で生活した経験がない者に、世紀という長い時間に含まれる問題を、広い視野からその答えを要求するのは、無理であり無謀なことと言えるからである。

しかも、教師自身が「二十世紀はどんな時代で」あったか、自分の判断を持たず生徒に問いかけるなどということ、教師の見識が疑われても仕方がないことになる。

確かに、生徒は中学校、高等学校において、歴史を学んでいる。しかし、それはほとんどが政治史であり、戦争史

である。本文のように「文明論・文明批判」に属するようなものは、生徒が小・中・高の基本的な学習を終えて、大学教育を受け、または社会人としての経験があつて初めて自分の視野に入ってくる問題である。

筆者の問いかけは、誰に対しても、また自由になされたものであつても、すぐにその通りを教室でなされてよいということではない。成長過程を踏まえてなされなければならないのである。そのことをまず教師は頭に置いておきたい。

しかしながら、その一方で「二十世紀はどんな時代でしたか」という問いかけは、誰に対してもなされなければならぬものを含む。それは「自分の生きた時代は、どのような特徴を持った時代でしたか」という問いかけと繋がり、自分に与えられた時代状況と切り離されて人間は生きることはできないからである。二一世紀に生きた者には「二一世紀はどんな時代でしたか」という問いかけがいつの日にか突き付けられる。今の高校生にとって、将来「あなたの生きた時代は、どのような時代でしたか」という質問になるのである。

「二一世紀はどんな時代でしたか」という問いかけは、いつの日にか自分に突き付けられて、自分で答えを導き出さなければならぬことを生徒に説明した上で、学習に入らなければならない。

ここまでの事を板書で示せば、

我々(教師、生徒)

教師

私はこう考える(プリントで用意する)

生徒

答えることが難しい。なぜか?

答

・それを答えるだけの社会経験や問題意識を
持っていない。

・自分の進路を考えることが先。

・自分の生きた時代の特徴を考えるのは将来
の課題

回

「二十世紀はどんな時代でしたか」

断言

筆者独自の論を展開

筆者

「二十世紀はコンクリートの時代」

筆者の問いかけに生徒が答えるのがなぜ難しいのか、時間をかけて考えなければならぬ。急いで、学習が上滑りになる。また、教師の時代認識を踏まえた文章を生徒に提示する必要があるが、それは筆者と全く異なる場合がほとんどであろう。

自分生きた時代をどのように捉えるかは、様々な立場に

よるのであり、その立場から導き出されるのは多様な答えになる。

三

以上を踏まえてやとと筆者の論の検討や筆者の論からの学びとなる。

それを先に教材観として示せば、私の場合は次のようになる。生徒に対しての文章なら、「貧、病、争」を詳しくして述べることになろう。

「教材観」

教材冒頭の「二十世紀はどんな時代でしたか」と尋ねられたら、皆さんは何と答えるだろう」という筆者の問いかけは、読者である我々個人に向けられたものである。自身自身がどういふ答えを用意するかは、自分の「時代認識、社会認識」が問われることとなる。どのような立場に立ち、どのように時代や社会を見るかによって、答えが異なってくる。因みに、同じ教科書に収録されている「戦争の「不可避性」(西谷修)では、「二十世紀はしばしば「戦争の時代」と言われる」と書き出される。

どのような立場から、どのように時代を見るかによって答えが異なることを、まず生徒に理解させたい。生徒に

とつて、このような問いかけはあまりに大きく、抽象的であるが故に、すぐに答えが出ないかもしれない。しかし、今は答えが出なくても、将来的に自分なりの答えを用意しなければならなくなる。そうしなければ、自立した人間にはなれない。私なら「二十世紀は、自国の利益や愛国心を尊重することによって「貧、病、争」を招いた時代」と答えたい。また「困難な病氣との闘い」に苦勞した時代でもあった。

自分に与えられた時代的条件は、自分が背負うしかないのである。時代をしっかりと見据え、その時代の特徴と意義について考察しなければならぬ。まずは、そのことを生徒にしっかりと理解させたい。

筆者は建築家である。だからこそ、コンクリートに目が行き、コンクリートが果たした役割の大きさを的確に捉え、また丁寧に説明できたのである。そして、現在だからこそ浮かび上がってきたコンクリートの持つ課題が提示できたのである。

本文は、大きく分けて二段構成になっている。前段は、コンクリートが二十世紀に果たした人間社会における貢献の実際が述べられ、後段はコンクリートが抱えなければならなくなった限界と課題が述べられている。

言語事項に関しては、この論理的構造を捉えるために果たしている言葉を見付けることによって、「言葉の持つ働

き」について理解させたい。前段、後段において筆者が丁寧に論を構成している述べ方は、生徒の論理的思考力を養成するだけでなく、どのように効果的に表現するかの学びにもなる。理解と表現の関連指導についても留意したい。

授業に際して、筆者の問題意識と我々の関係、筆者の論の展開とを、構造化された板書を用意して効果的に進めたい。

四

さて、筆者の論述について話が移せば、最初に目に付くのは、段落の繋ぎの言葉である。効果的で明確である。

形式段落の第二段では「それほどに」、ついで第三段では「まず」、第四段では「しかも」、第五段では「だから」、第六段で「しかも」となっている。論の展開を考えると、これらの繋ぎの言葉は非常に効果的である。

第一段で筆者は「(二十世紀は)コンクリートの時代でした」と自分の結論を出している。次に述べる文章では、その結論に至った理由を述べることが多い。とすれば、繋ぎの言葉として「なぜなら」という接続詞が選んでもよいのである。理由を述べる言葉としてはそれが一般的である。しかし、それを筆者は採用しなかった。同じ結論を述べるにしても、「それほどに」と程度を述べる言葉の方が、論理が直接的に繋がっていく。しかも、程度を現しているので、

結論を補佐する働きが強くなる。

「それほどに、コンクリートという素材と、二十世紀という時代は、相性がぴったしだったのである」と「素材」と「時代」の結びつきを強調している。

二十世紀の特徴を述べた後は、それを支えたコンクリートの特性を「まず」と述べていく。

- ① コンクリートは場所を選ばない。
- ② コンクリートの構造材料の入手が容易。
- ③ コンクリートほどに普遍的（グローバル）な建築技術は、かつて歴史上存在しなかった。
- と述べ、「しかも」と①②③と同時に次の利点も有していたと述べる。

④ 場所を選ばないと言う普遍性のみならず、どんな造型でも可能とするという、もうひとつの普遍性、別な言い方をすれば自由を有していた。

コンクリートにはこういう利点があるから、当然の帰結として「建築を学び始めたばかりの学生」でもコンクリートを利用した造型ができる。コンクリートは「群を抜いて「易しい建築」なのである」と重ねる。ついで両方が同時に成立しにくい面を克服する利点を次のように付け加える。

「形の自由さにプラスして、表層の自由というおまけもついでくる。

・豪華でお金がかかったふうな建築にしたい時

・未来っぽい味付けにしたい時

・自然派、エコロジー派を気取りたい時」には、それぞれに工夫を施すことによって、思い通りの建築ができる。

至れり尽くせりの説明だが、ここに建築家としての筆者の特性がある。

建築素材の特性を知りつくし、それに対する丁寧な説明、全世界のコンクリートを使った建築物の紹介、その独創性の価値の説明など、筆者の工夫は緻密である。

授業に際しては、論述の整理だけでなく、筆者の論述の仕方も学習の視野に入れなければならない。

五

以上のことを踏まえて、目標と板書を次のように設定したい。

【目標】

1 「二十世紀はどんな時代でしたか」という筆者の質問は、読者全員に向けられたものであることを理解する。

2 教師も生徒も、筆者同様に答えを用意しなければならぬが、生徒にはすぐに答えられない事情があることを理解する。しかし、それは同時に自分の将来の課題にな

ることも理解する。

3 「二十世紀はコンクリートの時代」と言い切る筆者の主張の価値とその論拠を捉える。

4 筆者が自分の主張を効果的にするために工夫した点を考える。論理の展開、段落の関係、またそれを可能にしている言葉の使い方、事例の活用など多様な視点が用意されていることを捉える。

〔板書〕

我々（教師、生徒）

教師

私はこう考える（プリントで用意する）

生徒

答えることが難しい。なぜか？

- 答
- ・それを答えるだけの社会経験や問題意識を持っていない
 - ・自分の進路を考えることが先
 - ・自分の生きた時代の特徴を考えるのは将来の課題
- 回

「二十世紀はどんな時代でしたか」

断言
躊躇なく断言

「二十世紀はコンクリートの時代」

筆者（建築家）

断言できた理由、筆者が施した工夫は何か？

1（それほどに）コンクリートという素材と二十世紀という時代の相性がぴったり

- ・二十世紀の都市、国家、文化（と）

・二十世紀のテーマ

（グローバリゼーション
インターナショナルイズム

2 コンクリートという素材の特性

（まず）

① コンクリートは場所を選ばない

普遍的な建築技術はかつて歴史上存在しなかつ

た

② どんな造型をも可能にする

（だから）

ア 建築を学び始めた学生でも好む

（しかも）

イ 表層の自由が可能

- ・豪華
- ・未来っぽい

・自然派、エコロジー派

また、言語事項と筆者の工夫をもっと取り上げたい場合

は、板書とは別にプリントを用意することも考えられる。
一案を示せば

言語事項

それほどに || 程度 + 理由 : : : : : 採用

なぜなら || 理由 : : : : : 不採用

説得力を高めた視点、表現

・ 広い視野 : : : : : 時代のテーマ

・ 広く外国の建造物の紹介

・ 程度を現す事例 : : : : : 建築を学び始めた学生 (でも)

・ 素材 (コンクリート) に対する広くて専門的な知識

・ コンクリートは場所を選ばない

・ どんな造型でも可能にする

畳み掛ける言葉、表現

それほどに ←

まず ←

しかも ←

だから ←

しかも ←

写真の効果を考えてみよう

・ 写真を見て初めて、その造型の独創性が分かる

・ 住民の驚きが伺え、その建造物の働きに住民の関心

が掻き立てられる

などが書き込めるプリントを準備することも可能であろう。

(本学名誉教授)